

氏名	箕輪 茉海
ヨミガナ	ミノワ マミ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第621号
学位授与年月日	令和2年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 漂然木象嵌による空間表現の探求 〈作品〉 Vital Sign 〈演奏〉

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	小椋 範彦
（論文第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	片山 まび
（作品第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	豊福 誠
（副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	三上 亮
（副査）	東京藝術大学	非常勤講師	（ ）	中内 安紀徳
（副査）			（ ）	
（副査）			（ ）	
（副査）			（ ）	
（副査）			（ ）	
（副査）			（ ）	

（論文内容の要旨）

木象嵌とは一般的に、木による平面装飾技法の一種である。種々の木を組み合わせ、木の色相・質感の差を使い分けて模様・図案を描出する。この技法は、様々な呼び名でいくつかの類似した技法が世界に点在する。国内においては、木象嵌と寄木細工とは区別すべき技法だが、国外においては言語として木象嵌と寄木は区別されない場合が多々ある。ヨーロッパの技法では、木だけではなく、木と異素材とを組み合わせで象嵌したものも多く見られる。一様に、主な用途・技法は、化粧板として箱物や家具、建物の内装への表面装飾、或いは絵画として作製される木画に用いられ、各国の文化に沿って、技法的に改良され発展してきた歴史を持つ。現状、国内における木象嵌の知名度は低く、箱根地方の土産物として現存する技術である事、伝統工芸の域で目睹される事は事実だが、広く木象嵌を主役とした美術作品の流通は見られない。裏を返せば、未開が故に数多の可能性を秘めた技術と位置付けられる。

こうした背景に基づく本論文の目的は、自身の感覚から本来の技術を再考し、平面装飾として認知される木象嵌に潜在していた立体化の可能性を提示し、独自の技法としての基盤を成形するものである。本論文で新たな木象嵌表現の鍵となるのは、筆者が自ら名付けた「漂然木象嵌」である。本論文は、「漂然木象嵌」の誕生から現在までの展開を追い、それにまつわる自身の経験や 思想、発想についても言及する。自らの精神と技術の結実を試みた自作を考察し、形体の必然性を解き記す事で、筆者が個として抱き追求する独自の世界観を言語化し、「漂然木象嵌」に集約される理想・観念・木への賛美について全文を通し明らかにしていくものである。

第一章では、研究の土台となっている自身の考え方や「漂然木象嵌」発見に至る経緯について述べる。まず、自作に共通する大きなテーマとなっている自然への憧憬について、自身の記憶や実体験を元に、その感覚的な思いの実態に迫る。次に、筆者が木象嵌と関わり始めた初期の記憶・経験を振り返り、従来の木象嵌技術習得から発進した自身の作品制作が漂然木象嵌の探求へと転換された出来事について詳述する。章内で語られる経験や自身の感覚は全て、筆者の自己表現として「漂然木象嵌」が生まれた理由を裏打ちし、この新たな技法に見る魅力を強調するものである。

第二章では、ヨーロッパの木象嵌技術の検証を目的とした自身のフランス留学を基軸としている。フランスの木象嵌であるMarqueterie(=マクトリー)の技術修得から得た知識・経験を、それまでの自身の制作活動と照合し、全体として精神面・技術面の両方向から漂然木象嵌の改善を示唆していく。フランスにおけるMarqueterieは、日本の木象嵌と寄木細工の両方に相当する技術だが、フランスのみならずヨーロッパ各地でもてはやされた歴史を持ち、その実績と汎用例は日本の比ではない。こうした背景は、筆者の中に想像以上の関心を生み、木象嵌の多様性を肯定する事で「漂然木象嵌」の主幹となる考え方を洗練していく重要な転機となった。異国の技法を知ること、新たな視点で自身の制作を見直すことに繋がり、本章ではそうした視点から日本の木工技術を俯瞰し考察する。また、Marqueterieを現代の生きた技術と位置付け、自身の工芸観に共鳴していることにも言及する。

第三章は、博士学位審査展出品作品「Vital Sign」について述べる。作品は部屋に見立てた空間に「自然から与えられる開放感」が漂う様子をイメージして表現したものである。Vital Signとは、生命徴候を意味している。’ ’ 息づくもの’ ’ と副題を付けた本作のテーマは生命感であり、特に焦点を当てているのは日常生活に潜む自然の存在と、その美しさである。本章は、コンセプト、素材、作品の制作工程、の順に詳述し、作品が完成する過程を思想と技術の両方向からくまなく解説する。本作では、Marqueterieを取り入れたことによって、筆者が作品のアイデンティティやナショナリティに関心を抱き、それらと向き合って制作したことが一つのポイントとなっている。本章をもって、木工における新たな技法としての「漂然木象嵌」の独自性を明記する。

最後に、本論文を通して明らかになった自身の世界観の正体と、作品「Vital Sign」を以て表現した形体、自ら確立させた漂然木象嵌の在り方を照合すると共に、今後の課題と展望を記し結論とするものである。

#### (論文審査結果の要旨)

箕輪茉海氏は、日本の伝統的な木工芸とフランスのマクトリーを組み合わせた独自の木象嵌表現を特徴とし、自らそれを「漂然木象嵌」と名付けた。本論文の構成は、以下のとおり3章からなる。

第1章では、「漂然木象嵌」という言葉が模様材を台材に嵌め込まない透かしによる技法であり、「漂う状態そのものを表す木象嵌」であることが示される。つづいて、その独自の技法により「自然から与えられる解放感」を表すことを目標とし、境、曲線と直線などの作家がこだわりをもつ造形要素について、言葉の定義とともに過去の体験にもとづいて論じられている。

第2章では、日本では紹介が皆無に等しいフランスの木象嵌技法、マクトリーについて、その歴史のほか、実体験にもとづいた制作プロセスが論じられており、当該分野における貴重な資料ともなっている。

第3章では、博士提出作品のコンセプト、制作プロセス、展示を中心に論じられている。1章で述べられた様々な要素とは、具体的に「建物などの人工物」と「蕨などの自然」がかかわりあう様であること、それこそが作家のめざす「自然から与えられる解放感」であることが論じられる。その後、独自であるがゆえに複雑な制作プロセスについて、写真と言葉によって、わかりやすく解説が付されている。

論文の総評としては、コンセプトや表現、技法、素材に対する考え方について、きわめて明快かつ丹念に言葉で表し、自己満足に陥ることなく、読者に誠実に伝えようとする点が高く評価できる。特に独自の技法に対する「漂然木象嵌」という名称はもちろん、ひとつひとつ自作のキーワードとなる言葉に対して十分に定義を行っている点は、単なるエッセイではなく、論文としての価値を十分に持ちうる優れた点といえよう。さらに技法の説明は工芸分野において重要であるにもかかわらず、文章化することに困難が伴うが、わかりやすく整理されており、後学の木工芸作家や木象嵌に関心のある人々にも意味のある成果となっている。惜しむらくは今後の方向性についての言及が不足しているが、それは今後の制作活動に期待を寄せることとしたい。

以上のように論文が作品の背景・技法・コンセプトをきわめて明快に説明するものであり、記述や構成にも優れていることから、審査員の同意のもと博士学位に相当するものとして意見の一致をみた。

#### （作品審査結果の要旨）

「漂然木象嵌による空間表現の探求」において箕輪茉海氏は、これまでの木象嵌には、見る事のなかった新表現を「漂然木象嵌」と名付けて、独自の表現技法を日本の木工芸とフランスの木象嵌技法「マケトリー」との組み合わせと融合によって展開し、空間表現作品としての具現化を試みた。その成果は、2019年度東京藝術大学博士審査展での展示発表での高い評価と多くの来場者に注目された事に、その成功を伺い知る事ができる。特に注目を集めた、机の天板装飾に用いられた「マケトリー」による表現には、作者の描写力とデザイン力の高さを示している。マケトリーについては、論文の第二章において、フランスのパリにあるエコール・ド・ブール工芸学院への留学中の実体験を元に、その制作プロセスを詳細に論じている。この論考の中で日本とフランスの木象嵌との歴史的背景と現状を踏まえ、木象嵌とマケトリーの差を両国の文化の差と認識し、日本的な要素とフランス（＝ヨーロッパ）的な要素を自覚的に自身の制作で組み合わせることで、新たな表現として確立を目指している。と述べており、本作品は漂然木象嵌として新たな表現の一步を踏み出した成功作である。

「Vital Sign」と名付けられたこの作品は、第3章の冒頭で述べられている様に、机・椅子・窓のような構造体に漂然木象嵌をあしらひ、部屋を想起させる空間表現作品である。

「自然から与えられる開放感」をテーマに、作者が日常の中に感じた自然の息吹を可視化し、鑑賞者に心地よさを伝える作品としている。机・椅子は床を通して一体化し、その関係性には作者の強い空間意識を表明している。机・椅子に植物をモチーフとした漂然木象嵌をあしらひ、木象嵌とマケトリーの技術を融合させた表現に技術力の高さを感じる。壁面に掲げた窓枠に格子戸を納めたような構造体には、自然木のもつ色彩を巧みに使い窓辺に映える夕日を表現しており、机・椅子・床・窓を一体とした作品は、そのテーマ性と空間表現力に優れた秀作である。

木工芸における新たな技術の展開と表現領域の広がりを今後の創作に期待できる学生であり、博士学位に相当する作品と認める。

#### （総合審査結果の要旨）

箕輪茉海氏は、木工芸の確かな技術を習得、研究し、木象嵌作品の法隆寺に伝来する「木画手箱」との出会い、重要無形文化財「木工芸」の保持者である大坂弘道氏との出会い、アルフォンス・ミュシャの流れるような美しい曲線の出会い、そしてフランスのパリにあるエコール・ド・ブール工芸学院への留学中に「マケトリー」の更なる研究を高め日本の技術の木象嵌、と併せて独自の表現を考案し「漂然木象嵌」と命名し立体的な木象嵌、マケトリーを用いて空間表現の探求をしている。

幼少期の三宅島に再訪する度に三宅島の生活は癒される感覚を得てきた。

「自然から与えられる解放感」は、木象嵌、マケトリーの作品制作において重要なキーワードになる。

論文構成において章立てもとてもわかりやすく、丁寧に説明されているので読んでいて安心感がある。

「Vital Sign」は木象嵌とマケトリーの組み合わせで木工表現に新たな技法として確立し、木象嵌の新たな空間表現を構築した。

絵画的な空間表現を構成するために様々な色の薄い板をパリの現地で調達した。

木象嵌による絵画表現のためには、可能な限り多くの色味が必要になる。

「Vital Sign」は作者の色の感性、色構成、材料の構成でより自然な絵画表現が完成する。机、椅子、床、窓を含めた空間表現は高い技術力、表現力、構成力は軽快である。象嵌された植物を忠実に表現されていて、自然な色味の表現と、象嵌の技術は秀逸である。

日本の木工分野、またヨーロッパマケトリーの分野においても注目される作品であろう。よって博士学位に相当するものである。